

# Voice of Handball

VOL.193

久保 弘毅

**PROFILE** くぼ・ひろき。1971年生まれ。アナウンサー時代にハンドボール中継に携わり、8年連続でブレーオフ男子決勝を実況。その後フリーのスポーツライターとなり、ハンドボールやアマチュア野球などの取材を続けている。



## すばる 送球の昂、三重花菖蒲編完結

～櫛田亮介監督（三重バイオレットアイリス）、任期満了に伴い退任～

### チーム改革の立役者

7年間にわたって三重バイオレットアイリスを率い、ブレーオフ出場常連チームへと育て上げた櫛田亮介監督が、今季限りで退任する。その功績とはどんなものだったのだろうか。

レギュラーシーズン最終戦、ホームのAGF鈴鹿体育館でイズミメイプルレッズに敗れ、三重バイオレットアイリスは6年連続のブレーオフ進出を逃した。試合後、引退選手のあいさつに続いて、櫛田亮介監督もファンの前で退任のあいさつを行なった。チームの公式発表は「契約期間終了につき退任」だった。

2015年の就任当初から、契約期間は「三重国体まで」と言っていた。21年の三重国体は、新型コロナウィルスの影響で中止になり、「三重国体で日本一」の夢はかなわなかつた。だがチームの雰囲気を変え、地元企業やファンから愛される人気チームに育て上げたのは、間違いないなく櫛田監督の手腕によるものだつた。ともにドイツでのプレー経験がある梶原晃GMと二人三脚で、コンセプトを大切にしたチーム作りを推し進めてきた。仕事とハンドボールを両立させて、選手としても人間としても大きくなる。勝つても負けても、応援してくれた人たちに自分の言葉で気持ちを伝える。女子選手にも自由度を持たせて、何事も自分で判

断できる選手に育てる。チームの理念に共感して、三重を応援するようになったファンは多い。

櫛田監督のキャラクターもよかつた。スヌーピーの飼い主チャーリー・ブラウンのような親しみやすい風貌で、丁寧に接する。選手たちから「櫛田さんは女心をわかつてない」と言われても、にこやかに受け流す寛容さがあった。ほんわかとしているながら、いざハンドボールとなると論理的で、チーム運営でも頭が回る。練習でも試合でも、理不尽な怒り方は一切しない。これまでの日本のハンドボール界にはいないタイプの指揮官だった。

櫛田監督が三重を率いた7年間での功績を、改めて振り返っていただきたい。

## 状況設定と駆け引き

櫛田監督のハンドボールは、狙い目がはつきりしていた。とくにセットOFFでは、どこを狙つて先手を取るかを、選手にも明確に伝えていた。

20—21シーズンは左サイドの園玲伊奈が、ヒザのケガで戦列を離れるまで絶好調だった。自慢の速攻だけでなく、角度のないところからも高確率でサイドシュートを決めていた。

対戦相手はもちろん團を警戒する。右

の1枚目DFを團に寄せて、1枚目と2枚目の間を広くする。「團にサイドシュートを打たせない。打たれるのなら、左バッタのアウト割りで勝負する」チームが多く

かつた。

そうなると、今度は三重の左バックが重要になってくる。原希美や多田仁美がアウト割りで得点できれば、DFも的に絞れない。さらには広くなつた1枚目と2枚目の間に、左サイドの團が切れ込むこともあった。1対1もできるサイドがいたら、相手は防ぎようがない。

21—22シーズンは、ここにポストを絡めた3対2で優位に立つ。象徴的だったのが1月のプレステージ・インターナショナルアランマーレ戦だった。

アランマーレは右サイドで松浦志織と前崎有里を併用する。松浦は左利きでシュートはうまいが、新人でファジカルが足りない。前崎はDF力があるが、右利きだから右サイドからの決定率がやや劣る。櫛田監督は、アランマーレの右サイドに狙いを絞った。

右の1枚目DFに入る松浦の横に、大型ポストの渡辺樹を置く。左サイドの熊嶋かずみはもともとがセンターダラ、回り込みながらポストの渡辺にバスを落とせる。体格差を活かして渡辺がポストシュートに飛び込み、松浦を退場に追い込む。

守りを固めようと、今度はアランマーレが前崎を投入してきた。三重は守り方を変えて、相手の展開を右サイドに追い込もう誘導する。GKもサイドシュートに強い岩見佳音に代えた。右サイドの前崎の「打たされた」シュートを、岩見がシャットアウトする。局所の3対2か

らDFへつながる攻防を、三重は終始支配している。

櫛田監督は

「端っこ

3対2は、日本女子代表

コーチを兼任

していった時

考え方です。

真ん中の2

対2は王道だけど、世界を相手には思うようにできない。サイド側にポストを絡めた3対2なら、日本人のサイズでも勝負できる。同じことを三重でもやっていきます」

櫛田監督が率いた7年間で、三重は「駆け引きのうまいチーム」と言われるようになつた。状況を限定しながら、自分たちの強みを的確に活かすあたりは、まさにクローズドスキル。戦い方が整理されていた。

制限のない状況（いわゆるオープンス

キル）でリアクションばかりを求められても、やられ放題で選手は混乱する。状況を限定することで、選択肢が明確になり、選手も判断しやすくなる。相手の変化にも対応できる。

櫛田監督は、日本の女子が苦手にしていた「変化への対応」をロジカルに解決



最終戦終了後、シューターズ（三重のサポーターの愛称）の前で退任のあいさつする櫛田監督

で60分間任せないと、粒の大きい選手には育たない。もちろん競争や出場時間も分け合うことも大事だろう。ただ、選手として成長するタイミングで長時間プレーしないと、選手の伸びは鈍る。

今季で言えば、3年目の熊崎が左サイドで大きく成長した。熊崎は地肩の強いセンターで、リーグ屈指の球の速さを誇る。ただキャリアの割にあがり症なところもあってか、2年目までは出番が多くなかつた。しかし今季は團が欠場した穴を埋める活躍で、左サイドの1番手にのし上がつた。

櫛田監督は独特の言い回しで、熊崎のことを評する。「以前の熊崎は、言い方は悪いけど『幕内弁当』だったんですよ。あれもこれもどやるんだけども、課題の優先順位がはつきりしないから、伸び悩んでいまして」と語る。



熊崎は剛腕を活かして、3年目に左サイドに定着。  
7mTも高確率だった

「2人とも、どこかばんやりしていたんですよ。コートに立つ前の準備であつたり、「今週はこれをやろう」といった取り組みが甘かった。2人には『生き方を変えるぞ』とも言いま

た。去年、三重国体のベンチ入り12人は決める段階で、熊崎は当落線上でした。本人にもそれを伝えて『もっと没頭しろ。自分自身と向き合え』と話しました。その後のあとからですね。課題の優先順位がクリアになって、今季の役割にはまりました。

團のようなワンマン速攻のスピードはないうけど、サイドシュートも7mTもGKをよく見て打っています」

熊崎自身が言う「今年はGKをよく見て打っています」との発言の裏には、櫛田監督との濃密なやりとりがあったようだ。GKの岩見が「今年のキーパーソンはクマ。苦しい場面でも決めてくれる。OFの流れを止めない」と絶賛するように、チーム内でも地位を確立した。

チーム待望の大型ボストの渡辺も、熊崎と同じ課題を抱えていた。

櫛田監督は言う。

「2人とも、どこかばんやりしていたんですよ。コートに立つ前の準備であつたり、「今週はこれをやろう」といった取り組みが甘かった。2人には『生き方を変えるぞ』とも言いま

したね。今のがいいのは、取り組む姿勢が変わったからです」

熊崎も渡辺も大卒3年目。ここで定位を確保できなければ、脇役として生き残る道を模索するしかな

い。もちろん脇役も立派な仕事だが、主力になれるボテンシャルがある選手には、チームの核になつてもらわないと困る。

櫛田監督は同様に、團や林美里も「旬」を逃さずレギュラーに抜てきしている。

1年目はチーム事情で右サイドでプレーした團は、2年目から本職の左サイドで大ブレイクした。現在はヒザのリハビリからの復帰が遅れているが、負傷する前は国内最高の脚力で、リーグ屈指の得点源になっていた。ただ点を取るだけではなく、それ以外の部分を意識することで、シュート率賞を獲得するほど得点力も伸びた。

昨年9月からキャプテンになつた林は、3年目から先発のセンターの座をつかんだ。5年目の今季は、得意な2対2にこだわりすぎることなく、中央のDFが厚いと見たら、左バックにポジションチ



櫛田監督は「中田はいい意味でエゴがなく、いつもチーム全体を見て行動できる」と信頼していた

## チームは次のフェイズへ

櫛田監督は育成力で、三重をプレーヤーの常連に引き上げた。だが近年は、新人獲得で後手に回つていた。他競技ならフロントやスカウトが選手獲得を受け持つが、日本のハンドボールでは監督に頼る部分が大きい。

日本代表のキャプテンも務めた原の後



高木のようなママさん選手（写真）もいて、小林のような大学院生もいるのが、三重の多様性

い。2児の産休から復帰をめざすGK高木エレナは、チームの違和感を口ににする。「ウチの『楽しそう』な表面だけを見て入ってきた子たちは

最終戦でイズミに22-30で敗れたあと、櫛田監督はそう言つて天を仰いだ。仕事とハンドを両立しながら、選手としても人としても強く、魅力的になれる。学生時代に一流と呼ばれなかつた選手でも、良質なトレーニングを重ね、戦術理解を高めていけば、チームバリューのある選手にも勝てる。櫛田監督の想いは、チームの原点でもある。来季はもう一度、その原点に立ち返りつつも、上位と戦える

「だからこそ、このメ、  
やり方で勝ちたかったな」

しまつたのか。5年連続でプレーに出たが、一度も勝てていない。ヘルムに勝ち、日本一になるために、次の段階に来たのかもしれない。

ところが「楽しい」や「対等」とい  
た言葉が独り歩きして、チーム内で意  
のズレが出てきた。長期政権で、櫛田  
督のおおらかさが「緩さ」と解釈され

対戦相手は「三重つて根拠のない自信を持つているから、やりにくい」と、よこぼしていた。

よさであり、めざすところだった。勝  
ても負けても堂々と振る舞い、劣勢で  
笑顔を忘れず、1人ひとりが目を合わさ

ちょっととノリが違うんですよ。『イエイ』が『ウェイ』にならないよう、一度立て直します。

日本体育会系にありがちな「支配と服従」とは一切無縁のスタイルで、櫛田監督はチームを強くした。日本のハンドボール界では、まだ早すぎたのかもしれない。だが、理想を追い求める櫛田監督の姿に共鳴し、勇気づけられた人間も多かった。優秀な人材だから、4月からの仕事も決まっている。また新たな場所でも、その優しさと柔軟な笑顔で、多くの人々を照らし続けてほしい。

D.F.でも中央で奮闘し、地元三重出身者としてチームの顔になつた。櫛田監督でなければ、万谷はハンドボールを嫌いになつて、とつくる昔にやめていたに違ひ

のものでは得意なステッブショートを軸に、シユートフェイクからのポストパスや、目線で相手をだましてのカットインなど、できることの幅を広げていった。

う 櫛田監督体制になる前 万谷は無理 やり「打ち屋」をさせられ、得意でもないロングシートを打つては外して、いつも試合後に落ち込んでいた。櫛田監督

「林田さんい三課を担当して下さい」と  
てくれました。そこは本当によかつたで  
すね。それ以外はなにかあつたかな?」  
もちろんコメントの後半は冗談だろ  
う。節田吉啓本刊による前、万谷は無理

選手を増やしていくかないと、差は開く一方だろう。チームには変化が必要だつた。厳しいことも書いたが、三重がリーグ屈指の人気チームになつたのは、間違いなく櫛田監督の功績だ。チーム最年長で、この3月に引退した万谷由衣は言つ。

23